



いとう



海援隊旗(二匁きの旗)

<https://www.ryoma-kinenkan.jp>

夏雲 KAUN KIHOU 奇峰

企画展

「半平太と京都」展

会期：令和7年7月19日(土)～9月15日(月・祝)

本年令和7年(2025)年は武市半

平太の没後160年にあたります。尊王攘夷を掲げ、「土佐勤王党」を率いた彼にとつて、京都で政治活動に奔走した文久2年(1862)から翌年にかけての半年ほどの歳月は、人生で最も充実していた時期だったことでしょう。本企画展では、京都時代の半平太の人脈や政治活動の実態を様々な資料からご紹介します。

1 幕末の京都

近世の京都は、將軍の上洛がなされた初期を除くと、江戸・大坂との対比で文化都市としての側面が取り上げられることが多いといえます。一方、幕末期には、約230年ぶりに行われた將軍の上洛に象徴されるように、政治の中心が幕府所在地の江戸から移ることになりました。幾多の政局が繰り広げられたこの時期の京都は、「政治都市」と評価されています。

安政期以降、天皇・朝廷の政治的位置が上昇し、文久年間には諸侯・諸藩士が相次いで上洛・滞京して、種々の政治活動が京都を舞台に展開されていきます。そんな文久期の京都を席巻したのが「尊王攘夷」論で、天皇・朝廷のお膝元である京都は尊攘派結集の核となりました。文久2年8月に上洛した半平太も、土佐藩における尊王攘夷派の代表として、政治活動に奔走していきます。

2 京都における半平太

上洛後の半平太は、小南五郎右衛門ら同郷の藩士はもちろん、久坂玄瑞ら他藩の藩士、さらには公家(三条実美や姉小路公知ら)や皇族(青蓮院宮)にも直接面会し、政治活動を展開していきます。そうした活動は、文久2年10月の攘夷決行を幕府に促す勅使の江戸下向へと結実します。

江戸からの帰京後も、半平太は変わらず国事に奔走する一方、土佐藩隠居山内容堂が文久3年正月に上洛すると、半平太は容堂との相剋に苦悩することになります。京都政局、開国・攘夷問題などに対する両人の政治構想には大きな隔たりがあったのです。

この時期には、3代將軍家光以来となる將軍家茂の上洛や、將軍・諸大名を引き連れた孝明天皇による賀茂社・石清水社両行幸が決行されるなど、政治の在り方は大きく転回していきます。半平太は自らの宿願に向き合いつつ、こうした政局の推移に何を思っていたのでしょうか。

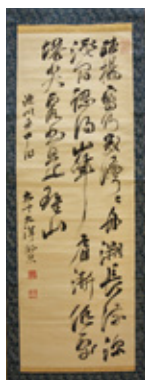


公文菊傳画武市半平太肖像画(当館所蔵)

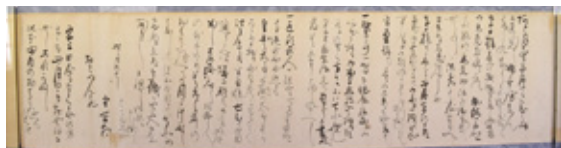
企画展に関連して、以下の関連行事を開催予定です。皆様のご参加をお待ちしております。

- ◆記念講演会 7月21日(月・祝) 13時30分～15時30分
・講師 千葉拓真氏(鳥取市歴史博物館学芸員・飯田市歴史研究所調査研究員)
・演題 「近世中後期から幕末の諸藩と京都」
- ◆学芸員による講演会 9月13日(土) 13時30分～15時
・講師 安岡達仁(当館学芸員)
・演題 「京都における半平太の人脈と政治活動」
※両講演会は電話・FAX・メール・HPお問い合わせフォームから要申込
- ◆展示解説
7月21日(月・祝) 11時～、8月23日(土) 14時～ (各回約30分)

安岡 達仁



山内容堂詩書(当館所蔵)



文久2年(1862)12月27日富宛武市半平太書状(高知県立歴史民俗資料館所蔵)

企画展「幕末維新期の写真」展を振り返って

本展では、幕末維新期の医師・坂井直常が集めた写真や坂本家が所蔵していた写真を中心に53点を展示した。本稿では、企画展の振り返りとして、展示でも触れた最も有名な立ち姿の龍馬の写真について記しておきたい。

現在、立ち姿の龍馬の写真のガラス原板は、高知県立歴史民俗資料館に保管されており、長年ガラス自体を鑑賞するアンプロタイプだと思われていた。しかし、2015年の東京都写真美術館の調査により、アンプロタイプではなく、紙焼きを目的とした種板だと判明した。

このガラス原板は、上野彦馬に写真技術を学んでいた土佐藩の井上俊三が撮影したと伝わり、そのご子孫宅に保管されていた。それを、第二次世界大戦前に郷土史家の武市佐市郎が譲り受け、武市家から高知県へ寄贈され、県立歴史館の前身である郷土文化会館が管理していた。

そもそも、ガラス原板が被写体の龍馬に渡されておらず、撮影者の手元に残っていたという時点で、ア

ンプロタイプであるはずがなかった。龍馬には、鶏卵紙に焼き付けられた紙焼き写真数枚が渡されたはずで、その一枚が下関でお世話になっていた伊藤家に残っている。

本来、紙焼きを行うための種板であれば、後ろに黒い布などを敷いてもガラス自体の鑑賞には不向きなはずだが、龍馬のガラス原板は鮮明に画像を鑑賞することができたため、東京都写真美術館が調査するまでは、ほとんどの人がアンプロタイプだと思い込んでしまっていたのである。

今回の企画展の特別講演の講師である写真研究者の倉持基先生によると、種板のガラス原板と紙焼きの両方が現存している写真は大変珍しく、とても貴重な資料だそう。

当館ではこのガラス原板の複製を常設展示室で展示しており、撮影年を「慶応2〜3年」としているが、今回の企画展では、慶応3年1月の可能性を提示した。

龍馬が長崎の上野彦馬の撮影所で撮った写真は、服装や髪型から考えて、①立ち姿の写真や②椅子に座った写真、③仲間たちと撮っ

た写真、④上半身の写真など、同じ時に4種類以上撮ったと考えられる。これらの撮影時期を考えるには、溝淵広之丞の家に伝わる④の上半身の写真にヒントがある。



（複写）原資料は高知県立歴史民俗資料館所蔵

この写真の周りには、溝淵の従者の直話として、「慶応2年1月の撮影で、海援隊を組織する前」だったと記されている。

しかし、慶応2年1月は薩長同盟の結ばれた月で、龍馬は前年末から下関に滞在しており、1月1日に三吉慎蔵と初めて会い、そのまま10日に下関から京都へ向かい、ずっと京都に滞在していたため、この月に長崎で撮影することは不可能である。おそらく従者の記憶違いであろう。

そして、2015年に龍馬の写真

を調査された一人である三井圭司氏は、2年前に当館で私と対談した際、「井上俊三は土佐藩の命によって上野彦馬のもとで修業していた人物であり、藩の公金を使って修業している以上、脱藩者の龍馬の写真を撮るには上司の許可が必要であろう」と推測されていた。もつともなご指摘で、その上司とは出崎官（長崎土佐商会の長）の後藤象二郎で、後藤と龍馬の提携は慶応3年1月半ばであるため、龍馬の写真は、この時期に撮られたと考えるのが自然である。

しかし、「龍馬が寄りかかっている黒い台は、慶応元年には白く塗り替えられており、それ以前の撮影でなければならぬ」という研究もある。これについては、日本赤十字社を創設した佐野常民が慶応3年頃に撮った時も黒い台に寄りかかっているため、慶応3年にも上野彦馬の撮影所に黒い台があったと考えるべきである。

これらを考え合わせると、断定はできないものの慶応3年1月の撮影である可能性が高い、と考える。

三浦夏樹

タイムカプセル郵便



「龍馬へ贈る手紙」スタート！

桂浜にたつ坂本龍馬像は、今年の5月27日で建立から97周年を迎えました。今年も龍馬像前の広場で記念式典を開催し、当館館長より祝辞を述べさせていただきました。当日はお天気も良く、龍馬に大接近も開催されており、たくさんの方に見守られながらの式典となりました。



龍馬像建立記念日である5月27日から、当館では龍馬生誕190年の記念事業として、新しい企画がスタートしました。

その名も「龍馬へ贈る手紙——筆啓上仕候——」です。

龍馬生誕190年と、10年後の生誕200年に合わせ、「あなたの心に描く龍馬とつながる」をコンセプトに、龍馬へのメッセージを募集いたします。龍馬の190回目の誕生日である令和7年11月15日までの期間限定となります。全国の皆様からのご参加をお待ちしています！

参加方法

- 募集期間：令和7年5月27日（火）～令和7年11月15日（土）
- 募集内容：あなたの心に描く龍馬へのメッセージ
「龍馬へ贈る手紙——筆啓上仕候——」
- 応募方法：①ご来館いただく場合
本館1階ミュージアムショップにて【専用ポストカード】を購入し、メッセージを記入いただき、専用箱へ投函してください。
②通信販売をご利用いただく場合
当館HPのミュージアムショップの通信販売にて、【専用ポストカード】をご購入ください。メッセージを記入いただいたポストカードと参加申込書を、封書で当館までお送りください。（封書の送料はお客様ご負担をお願いいたします）
- 参加費：350円（税込）（ポストカード代150円、返送料200円）
※通信販売をご利用の方は購入時の送料（定形25g 140円）が追加のご負担となります。
- 保管期間：令和7年11月16日～令和17年11月15日（同日に開封します）



応募された方の中から、抽選で次の各賞をプレゼント！

- トートバッグ賞 坂本龍馬生誕190年限定トートバッグをプレゼント
 - オリジナル名刺賞 龍馬の文字で作るオリジナル名刺をプレゼント
 - ラジオ「海の見える窓から」賞 FM高知「海の見える窓から」番組内でメッセージをご紹介
- ※各賞は応募いただいた中から抽選で33名様へプレゼントします。

- 応募に関する注意事項や、応募いただいたポストカードのご返却など
詳細については右記のQRコードから坂本龍馬記念館HPをご覧ください。



龍馬へ贈る手紙

竹田 綾

三年を経て思うこと

副館長の廣瀬です。令和4年4月に当館にお世話になり始めてから、早くも3年と3か月が経過しました。

個人的な雑感を少しばかり。前職までは、カレンダー通りの休日の生活だったのですが、当館は年中無休のためシフト表により休日が不定期となっています。

最近では少し慣れてきましたが、曜日の感覚が殆ど無くなっています。毎朝、新聞で曜日を確認していますが、それでも日中分からなくなるということがあり、例えば、役所にTELした時に「なかなか、出ない!」とイライラしていたところ日曜日だったこともあり、こうした勤務形態を長年されながら、企画展示やお客様本位のおもてなしを積み重ねてこられた先輩職員(私より年下ですが)には、敬服しています。

また、不定期の休日の際には、ほぼ、故郷の梶原町(四万川)に帰る生活を送っています。帰り道は、龍馬たち先人が歩いた脱藩ルートをほぼなぞる国道197号線です。梶原町役場からは国道を離れ、西方の大越峠の「維新トンネル」(写真参照)を抜けると、宮野々の関所跡、その先が四万川で、これらの地域を囲む多くの稜線が愛媛県との県境になっています。この行程沿いの風景や趣は龍馬脱藩当時とは違っているとは思いますが、山の稜線や山の皸から流れ込む谷川の流れなどから往時が偲ばれるのではないかと思っています。

高知県を誇りに想ってもらおう一助となるよう、経験・知恵・アイデアなどが豊富な職員とともに取り組んでいきたいと考えています。加えて、私の故郷も大切にしていきたいと思っています。



新職員紹介



小部 さくら

令和7年4月より高知県立坂本龍馬記念館で学芸員を務めさせていただきます。徳島出身のため高知に足を運ぶ機会が多く、子供の頃から同じ四国の住民として高知に対し親近感を抱いておりました。龍馬の名のつく場所やイベントを見かける度に、高知県民にとって誇れる偉人なのだというふんわりとした印象を受けていましたが、そんな龍馬を顕彰する記念館の職員となった今では、街中で龍馬の名を見ると身の引き締まる思いがいたします。まだまだ未熟者ではございますが、これから一層精進してまいりますのでよろしくお願いいたします。



横山 理恵

今年4月より坂本龍馬記念館で勤務しております。

私は博物館や美術館が好きです。展示はもちろん、その建物の外観や内装を鑑賞することも楽しみの一つです。当館においても、建物そのものに関心を持つお客様が時折いらっしゃるように思います。ガラス張りで見やすい色彩の本館に対し、新館はマットな外壁で落ち着いた色調。対称的に造られた二つの建物が訪れる人々の想像や好奇心を掻き立てているようです。坂本龍馬生誕190年の今年、多くのお客様をこの美しい建物と共に笑顔でお迎えできればと思います。よろしくお願いいたします。

龍馬の手紙

27

皆々どふ
もゆくさする事
をしらず、唯ひとまけに
まけ候よし、

(文久三年秋頃推定坂本乙女・春猪宛)

文久三年(一八六三)の書簡の中には、天誅組の変について記された物がある。そこには、天誅組が負けたのは戦の仕方を知らなかったためだという龍馬の見解が記され、続いて、もし自分が戦の指図をしたなら、討手は少数のため打ち破れたのにとの後悔の念が綴られている。

龍馬の言う「討手」とは、朝廷から天誅組討討を命じられた幕藩であった。天誅組は奈良の山中を転戦したが、鷲家・鷲家口の戦いにおいてほぼ壊滅状態となる。なお、戦地となった鷲家口村(現・奈良県吉野郡東吉野村小川)の

農民は、突如として村に現れた天誅組に翻弄されていたようである。斎藤純「伝説・世間話の交錯と異伝の成立―奈良県吉野郡東吉野村の事例を中心に―」(世間話研究会『世間話研究』第一号、一九八九年、一頁・三二頁)によると、「刀が血まみれで、怖うて、それが。(天誅組の者は)『怖がるな』いうて、ほで、礼として、兜鎧置いといてん」というものや、「天誅組通つた時、『怖いよお』て逃げたら(天誅組が)『怖くないぞ』いうたんやて」との伝承が小川地区の人々によって語り継がれている。いずれも真偽不明だが、騒動により村の平穏が壊されたことは確かであり、当時の村人が天誅組に対し恐怖を抱いたとしてもおかしくはない。

なお、騒動後、天誅組は信仰の対象へと変化する。現在所在不明である『五條北之町順番帳』(田村吉永『天誅組の研究』中川書店、1920年)の「亥九月月番行司木綿屋利右衛門」には、「天誅吉村大神」として、周辺村民により虎太郎が祀られたことが記されていたという。かつての同志が後に村々の神様になるとは、龍馬としても想像しえなかったことだろう。

小部 さくら

龍馬館の あの日 あの日 あの時



龍馬館の歴史や普段見ることがない龍馬館の一面を写真とともにご紹介するコーナーです。No.4

■ 龍馬伝効果くっきり。過去最高の入館者数で入館制限も。

大河ドラマ「龍馬伝」が放送されたのは今から15年前。好きな歴史上の人物で常に上位にランクインする坂本龍馬を人気俳優である福山雅治さんが演じられ、県内は連日大勢の観光客が訪れ、当館も大変な賑わいとなった。

入館を待つお客様の列や駐車待ちの車の列、駐車場にはずらりと10台以上の観光バスが並ぶなど、平日はこれまでの土日、土日はこれまでのお盆のような忙しさで、展示室、ビデオコーナー、ミュージアムショップ

など、館内はどのフロアもお客様で溢れ、連日大賑わいとなった。中でもゴールデンウィークには館内の大混雑により開館以来初となる入館制限を実施し、待ち時間は40分になることもあった。その間に学芸員が龍馬のミニ講座を行ったり、フォトスポットで記念撮影のお手伝いをするなど対応にあたった。入館者数は1日の人数として過去最高である6,686人を記録し、その年には年間44万人を超える例年の3倍以上の入館者数となり龍馬伝の効果がかっきりと表われる結果となった。そのほか龍馬の写真使用の申請や団体予約の電話、館長や学芸員への講演依頼も殺到し、目が回るほどの忙しさであったが、龍馬の人気ぶりを再認識でき、達成感や充実感を感じられる忘れられない一年となった。

小島 千穂



入館を待つお客様の長い列

土佐藩京都藩邸史料からみる 京の治安維持体制

上村 香乃

平成二十一年十二月に高知県が購入し、現在当館に所蔵されている「土佐藩京都藩邸史料」総数五七四点を数え、その内訳は、土佐藩の役人らによる公的史料や京都での風聞書、京都警衛にかかわる史料や役向・人事にかかわるものなど、多種多様である。藩邸史料がこのようにまとまって残存している例は全国的に見ても少なく、そのため非常に貴重な史料であると言える。

この中から、京都における治安維持にかかわる史料を厳選し、当館の収蔵品展として「土佐藩京都藩邸史料」展を現在開催している。本展では特に、土佐藩に係するものに絞って、

- ① 清和院御門の警衛
- ② 岡田以蔵の捕縛事件
- ③ 池田屋事件と明保野亭事件
- ④ 寺田屋事件

の四つのテーマを設け、幕府側による治安維持の実態に迫った。幕末の京都の治安は決して良かったとは言えず、強盗や追剥、人斬り、私闘などが横行していた。こうした中で、天皇をお守りする

るために開始されたのが禁門警衛（御所警衛）であった。御所の外構には九つの門が存在し、このうち土佐藩が守ったのが清和院御門である。清和院御門は上皇が住まう仙洞御所の近くに存在し、門のすぐ東には京都守護職の本陣も置かれていたことから、非常に重要視されていた門であったと考えられる。土佐藩の藩兵はここで常時警衛を勤め、治安の維持に従事した。

京都の治安維持を担当していたのは大名だけではない。京都守護職や京都所司代をはじめ、奉行所の役人やお抱え浪士の新選組に至るまで、様々な人々が携わっていた。このうち、京都市中の治安維持を最前線で務めたのが京都町奉行所や新選組であった。

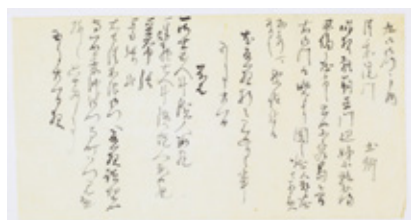
京都町奉行所の働きやこれに対応する土佐藩の様子は、岡田以蔵の捕縛関連史料に見られる。以蔵は強盗まがいのことをして捕らえられ、京都町奉行所により取り調べが行われた。

らの所持品が、当時国許で容堂主導のもと行われていた大獄（土佐勤王党の弾圧）の重要な証拠となると、土佐藩側は考えていた。しかしながら、押収された所持品が土佐藩側に渡されることはなく、これについて土佐藩の役人は非常に残念であると述べたことが分かっている。

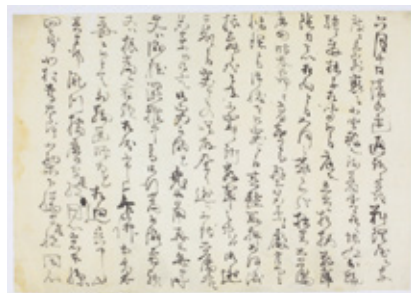
また、新選組の働きにより起きてしまった悲劇についても注目である。池田屋事件後に残党を討伐する過程で起きた明保野亭事件は、新選組と土佐藩、そして会津藩がかかわる重大な事件として発展する。

この事件で襲撃された人物の中に、麻田時太郎という土佐藩士がいる。麻田は池田屋事件には関与していなかったが、残党討伐の当日、明保野亭に偶然居合わせたことから被害を受けた。麻田を襲ったのは会津藩士の柴司であり、これを指示したのが新選組であった。

これにより、土佐藩と会津藩は一触即発の状態となるが、事件の翌日に



土佐藩京都藩邸史料 No.456 [清和院門警固申渡写]



土佐藩京都藩邸史料 No.125 [麻田時太郎供述書] (部分)

麻田が自刃し、これを受けて柴が自刃することで、喧嘩両成敗として両藩の衝突は回避された。企画展の最後では、坂本龍馬が遭難した寺田屋事件に触れ、幕府側の対応を追いながら、幕府が指名手配人の捕縛に失敗した例として紹介している。ここでは、龍馬捕縛にかかわっていた人物を詳細に追究するとともに、取り逃がした龍馬を捕縛することができなかった理由を探った。

幕末という激動の時代において、京都次第に政局の中心地となっていく。このような地で、幕府側の人々が何に取り組み、何を重視したのか。土佐藩京都藩邸史料を通して、幕府側の視点から企画展をぜひ楽しんでいただきたいと思います。

ミュージアムショップ便り

本館出口に位置するミュージアムショップでは、龍馬に関する様々なグッズを始め、年間を通して開催される講演会や企画展関連の商品等を揃えて皆様をお待ちしております。
数ある商品の中から今回は、手軽で人気のあるマグネットをご紹介します。
有名な龍馬の写真を使った新商品や高知県内の原材料を使った木のぬくもり溢れる品をご紹介します。

注目の新商品!! オリジナルマグネット(龍馬立位)

坂本龍馬の姿を思い浮かべた時、この写真の龍馬を想像する方も多いのではないのでしょうか。

撮影年月日は定かではないですが、慶応2年～3年ごろ、長崎の上野彦馬スタジオで撮られたもので、撮影者は彦馬から写真の技術を学んでいた土佐出身の井上俊三が関わっていたと伝えられています。

当時の貴重な湿板写真の原板は今も残っていて、この時代には珍しいブーツを履き、凛とした佇まいを見せる龍馬の姿は目を惹く大変趣のある写真です。

これまでも様々なグッズを提供してきましたが、今回は新作“オリジナルマグネット”のご紹介です。

小さくて軽量、お値段もお手頃なのでご来館の記念として、またご友人へのお土産としても最適ではないでしょうか。

冷蔵庫などにメモを挟んでおくなど、便利グッズとして活用出来ます。

もちろんここでしか購入出来ないオリジナル商品!

マグネットはお客様からの問い合わせも多く、こちらも今後人気ランキング上位に入る事は間違いないでしょう。

記念館へ立ち寄った旅の思い出に、ぜひお勧めの一品です。



500円(税込)

マグネット2個セット

こちらは高知県四万十市産のヒノキを使ったもので、特注の集成材より加工した自然素材をそのまま余すことなく生かした商品です。

坂本家の家紋である“組合角に桔梗紋”や“龍馬の顔”を模ったもの2つをセットに致しました。

繊細かつ巧みな技術でデザインされたマグネットは、これまで多くの皆様の手に取っていただいた人気アイテム!

心地よいヒノキ特有の香りや天然木が醸し出す味のある風合いも相まって、お部屋のインテリアの一つとして、ぜひ長く使っていただきたい商品となっております。



650円(税込)

※この他にもまだまだ色々な商品を取り揃えておりますが、今後価格変動や数に限りのある商品もございます。どうぞご了承下さい。

また今後も龍馬好きな皆様に喜んで頂ける商品作りに努めて参りますので、どうぞよろしくお願い致します。

西川 知佐

■「海に見える・ぎゃらいい」

海に見える・ぎゃらいいに広がる太平洋に島は見えませんが、代わりに大小様々な船が浮かんでいるのを時折見ることができます。

徳島から引越して来たばかりの私にとって、高知といえば何と言ってもカツオという印象でした。というのも、徳島の知人たちから「高知はやはりカツオが美味しい。特に塩で食べた方が良い」、「スーパーに売っているカツオですら徳島のとは違う」などと、耳にたこができるほどカツオの話聞いていたからです。さすがに隣県ですから、徳島で売られているカツオの中には高知から輸入している物もあるはずです。しかし、鮮度がものをいうのでしょうか、多くの徳島県民が高知のカツオの方が美味しいと口を揃えて言っていたのです。

また、歌川広重が作成した「六十余州名所図会」を引越以前に見ていたことも、カツオの印象に拍車をかけていました。この名所図会には、四国の名所として、伊予は「西条」、讃岐は「象頭山」、徳島は「鳴門の風波」（渦潮）が挙げられていますが、土佐は何故か特定の場所ではなく、「土佐 海上松魚釣」と題してカツオ（松魚）の一本釣りをしている土佐の人々の様子が描かれています。もはや名所といえるほど、江戸時代より高知ではカツオ釣りが盛んに行われていたのでしょうか。高知の方々のカツオにける思いは、今も昔も変わらず続いているように思えてなりません。

こうして、高知＝カツオという式が着々と脳内にでき上がり、引越す頃には高知の海に浮かぶ全ての船がカツオ漁船に見えるようになっていました。朝、桂浜花街道を通りつつ、太平洋に浮かぶ大きな船にチラリと目をやり、「朝の方がカツオを釣りやすいのかな」と考え、昼は館内から小船を見つめ、「初ガツオの季節だから大忙しのだろう」と、カツオ漁船に思いを馳せていました。

なお、先日ふと記念館近くの船を指さしつつ「カツオ漁船ですか」と副館長に聞いてみたところ、「ああ、あれは貨物船だね」と、さらりと言われました。



小部 さくら

入館状況

2025年6月20日現在

(1991年11月15日開館以来 33年218日)

◆入館者数 4,778,384人

■リニューアルオープン(2018年4月21日)以来 841,624人

編集後記

ある夏の日、入道雲を見た中国の詩人陶淵明は、珍しい形の峰々になぞらえて詩を作りました。その時々で全く違う形をとる入道雲は、私たちの想像力を駆り立て、その規模の大きさは自然に対する畏怖の念さえ与えます。昨年の夏は、入道雲をゆっくり眺めるのも億劫に感じるほどの猛暑に見舞われました。今年は「程よい」暑さの夏を迎えたいものです。

さて、夏の企画展「半平太と京都」展が始まります。本年が没後160年となった武市半平太の京都における活動の実態に迫ります。ご期待ください。(や)

館だより“飛 騰”第134号(年4回発行)表紙題字：書家 沢田 明子氏

〒781-0262 高知市浦戸城山830

発行日 2025(令和7)年7月1日 TEL (088)841-0001 FAX (088)841-0015

発行 公益財団法人高知県文化財団 http://www.ryoma-kinenkan.jp

高知県立坂本龍馬記念館 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00～17:00 年中無休

入館料 一般500円(企画展開催時900円)

高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は140円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。

〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで